womanてらす

東北の着物

ぜんまい紬

（山形県）

使い込むほど味わい

私たちに春の訪れを知らせてくれる山菜の一つ、ゼンマイ。春の味覚として、また乾燥させれば保存食として昔から身近な食材でした。雪解け時期の山の沢などに自生するゼンマイの新芽は、霜から守るために茶色の綿毛にくるまれています。綿毛は食用に加工する際に取り除かれますが、それを原料とした織物が「ぜんまい紬（つむぎ）」です。

綿花が育たなかった北国では、暖かい衣服を求め、この綿毛も利用しようと試行錯誤を重ねました。やがて養蚕から出たくず繭の真綿とゼンマイの綿毛を合わせて紡ぐ手法を生み出したのです。軽量で優れた撥水（はっすい）性があるぜんまい紬は、かつて漁師の作業着にも使われました。こうした特徴は現代の帯や着物になっても受け継がれています。

写真は山形の職人が作ったぜんまい紬の帯。軽くて汚れにくく、滑り過ぎないため、結びやすい。使い込むほどに、綿毛による味わいが増します。まさにかつての人々の暮らしの知恵が今に生きているのです。

柄の唐草は、古代ギリシャの遺跡などに見られるつる草文様が原形で、日本にはシルクロードを経由して奈良時代に伝わったとされます。四方八方にどこまでも伸びていくつるは生命力や繁栄、長寿を意味し、今も愛される吉祥文様です。

帯の柄と地色は同じ色調でそろえていますので、さまざまな着物とコーディネートが可能です。またこの帯は袋仕立てになっていて裏は紺の無地。唐草と紺無地をそれぞれ表にして締めることができます。一つの帯に秘められたさまざまな物語。時を超えてひもとくと、豊かな気持ちになりますね。

（田中陽子・「暮らしのクラフトゆずりは」店主）

帯はぜんまい紬「花唐草」、着物は紅花染「真綿手引紬八重霞」

〈第４金曜日掲載〉

「ｗｏｍａｎてらす」は第２、第４金曜日掲載です。